

平成16年度 田原市議会
海外行政視察報告書（エジプト・リビア）



エジプト



リビア

はじめに

2005 年 2 つの大きなプロジェクト、「愛・地球博」の開催、「中部国際空港」の開港への準備が進んでいます。特に万博については、愛知県内のすべての市町村を巻き込んだ一大プロジェクトであります。その中で、今回ユニークな事業として、一市町村一国フレンドシップ事業があります。出展する国と担当する市町村が協力して、ナショナルデーを成功させるとともに、この機会に交流の輪を広げようとする事業で、相互理解を深める絶好の機会でもあります。

田原市が担当するのは、リビアとラオスの 2 国。特にリビアについては、出版物やインターネットで調べてみても得られる情報はほとんどありません。しっかりした交流をするには相手国を勉強する必要があります。そのために私たち視察団は、リビアとともに同じイスラム圏のエジプトを視察し、自分たちの目で彼らの歴史、文化、生活のもとになっている宗教観についても学び、今後の交流に生かしていきたいと思います。

私たちの学んできたものを、少しでも多くの機会に田原市民の皆さんにお伝えすることが大切な使命だと思っています。

田原市民の皆様にとって、リビアが少しでも身近な国になることを視察団一同願っています。

視察の一端を報告書にまとめましたので、市民の皆様にご覧いただければ幸いです。

平成 17 年 2 月

田原市議会海外行政視察団（エジプト・リビア）

団 長 関 保 則

目 次

1	団員名簿	1
2	行 程	2
3	視察調査	
(1)	カイロ郊外文化史跡視察	3～4
(2)	サッカー地区の灌漑システムと農場視察	5
(3)	ナイル西岸文化史跡視察	6
(4)	ナイル東岸文化史跡視察	7
(5)	リビア・首都トリポリ視察	8～25
(6)	カイロ市内視察	26

田原市議会海外行政視察団（エジプト・リビア）団員名簿

役 職 名	氏 名	備 考
団 長	せき やすのり 関 保 則	議会議長 「社会主義人民リビア・アラブ国」フレンドシップ大使
副 団 長	かわい ひろと 河合 熙人	文教厚生委員会委員長
団 員	さいとう としお 斉藤 敏夫	総務委員会委員
団 員	すずき たつし 鈴木 達司	経済建設委員会委員
随 行 職 員	よこた なおゆき 横田 直之	議会事務局議事課長



表紙の写真

エジプト ギザの三大ピラミッド
リビア ホテルから見た町並み

田原市議会エジプト・リビア視察

日本との時差
7時間

※成田発着エジプト航空利用/カイロ・ルクソール・リビア国

日程表

日次	月	日	曜日	都市名	交通機関	時 間	行 程 表	食事	宿泊
1	11月	17日	水	田原 豊橋 東京 // 成田 // カイロ	ひかり262 N-ex15 MS-865 (飛行時間14H)	08:00 09:18 10:43 11:03 11:56 14:25 21:10	田原市役所集合出発 ひかり262号にて東京へ 東京より成田エクスプレス15号にて空港へ 到着後出国手続き 空路エジプト航空にてカイロへ 到着後ホテルへ	機内	カイロ スフィンクス・カイロ
2	11月	18日	木	カイロ カイロ ルクソール	専用車 MS-0233	終日 23:00 00:05	ホテルにて朝食 カイロ郊外文化史跡視察 スフィンクス・ピラミッド等 サッカラ地区の灌漑システムと農場施設視察 空路ルクソールへ ルクソール着後ホテルへ	朝食 昼食 夕食	ルクソール シェラトン
3	11月	19日	金	ルクソール	専用車	午前 午後	正午まで自由散策、その後昼食 ナイル西岸文化史跡視察 ツタンカーメン王の墓等	朝食 昼食 夕食	ルクソール シェラトン
4	11月	20日	土	ルクソール ルクソール カイロ	終日 MS-238	終日 22:25 23:30	ナイル東岸文化史跡視察 カルナック神殿、ルクソール神殿 ルクソール博物館等 空路カイロへ	朝食 昼食 夕食	トリポリ コリンシアホテル
5	11月	21日	日	カイロ トリポリ	MS-831 専用車	01:05 03:55 午後	乗り継ぎトリポリへ 着後ホテルへ トリポリ市内視察 リビア国外務省（午前） サブラダ遺跡（午後）	朝食 機内 夕食	トリポリ コリンシアホテル
6	11月	22日	月	トリポリ	専用車	終日	褒敬訪問 アルタカドム小中学校（午前） 在リビア日本国大使館（午前） トリポリ市役所（午前） 県知事秘書との昼食懇談会 国際チャリティ基金（万博担当機関）（午後）	朝食 昼食 夕食	トリポリ コリンシアホテル
7	11月	23日	火	トリポリ カイロ カイロ	MS-832 MS-864	04:55 07:30 18:00	空路カイロへ 到着後カイロ市内視察 エジプト考古学博物館など 空路帰国の途に	機内 昼食 機内	機内
8	11月	24日	水	成田 // 東京 // 豊橋 田原	N-ex22 ひかり321	12:55 14:45 15:43 16:36 18:00 19:00	到着後入国手続き 成田エクスプレス22号にて東京へ 東京着 東京にてひかり321にて豊橋へ 到着後、議会ハイエースにて田原へ 市役所到着後解散	機内	

カイロ郊外文化史跡視察 11月18日

～あらゆる歴史は現代史である～

ピラミッド・スフィンクス等の視察

■エジプトの概要



カイロ市はアラブ世界、アフリカ、中東の最大都市で、人口は約6,300万人。耕地は国土の4%未満で、他は砂漠地帯となっている。年間降雨量も20mmくらいで、そのため乾燥気味で、いつでも水分の補給ができるようにしないと大変である。朝夕は、ちょっと寒く感じる(14℃)くらいで、10時頃からは暑くなる。しかし乾燥しているので、木陰では気温ほどは感じない。

同行のガイドからの説明によると、人口の3%は金持ちで、40%は普通だが他57%は困窮しており、また青年層の10%くらいの人しか仕事はないといわれる。市民生活は貧しく、ロバが引く荷車をはじめ、馬車等が結構目にとまる。車も日本の20～30年前の車が数多く走っており、日本の中古車又は廃車でも十分に流通すると思う。

また、家屋も一般家庭では2階建て、3階建てが多いが、屋根は雨が少なかったためかとても貧弱で、板を並べる程度か、ヤシの葉が載っているなどであった。このため私たちが訪れた前日に降雨があったので、各所で布団とか衣類等がいっぱい干してあった。

■視察の概要



〔屈折ピラミッド〕

11月17日、成田空港より空路14時間、カイロホテル泊、早速文化史跡視察に入る。天気良好。半袖シャツでOK。

ピラミッドは、砂漠にそそり立つ石造建築物であるが、カイロ市街から車で30～40分で行けるところにある。ナイル川の水を引いた運河も整備され、カイロ市街は緑も多く、農地もナツメヤシの木、ホテイアオイ、野菜等栽培され、緑の地と砂漠が対照的である。

市内及び観光地といったところに小銃を持った警備員(軍隊か警察)が立っており、厳戒態勢を思わせる。

午前中、赤のピラミッド、屈折ピラミッド、階段ピラミッドを視察する。メンフィスでは、スフィンクスとラメセス2世の巨像を見る。

赤のピラミッドは、中に入る。急な階段の上り下りで、完全に足にこたえたが、門部は素晴らしく、よくぞ人力でこれまでのものを作ったと感嘆しきり。

午後はギザの三大ピラミッド視察。ピラミッドは、紀元前2550年頃以降、3人の王により建造された王の墓であり、また古代エジプトでは王が神とされ、権力の証としてピラミッドを建設。多くの農民と職員を建設作業に従事させ、神である王のために奉仕をした。建設に関しては、国を挙げての公共事業であった。ピラミッドの規模はクフ王高さ137m、カフラ王136.5m、メンカウラ王66.5mの他に、メンカウラ王妃の小型ピラミ



〔ラメセス2世の巨像〕

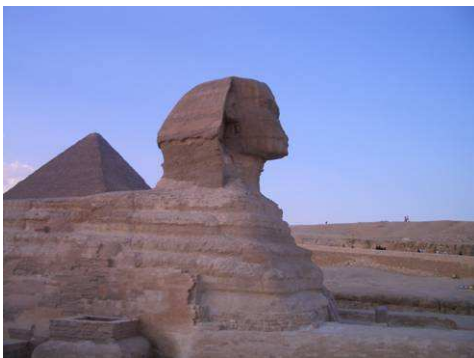
ッドがある。

クフ王のピラミッドは、今から 4500 年前の建造物でありながら、四角錐の四辺は、ほぼ正確に東西南北を向いており、2.5t もある石灰岩、約 300 万個からなるといわれ、建設には 30 年の歳月と労働力が費やされている。王の墓といわれ多くの財宝が埋蔵されているはずであったが、王のミイラとともにどのピラミッドからも発見されていない。

大型機材のない時代にどうやって積み上げたのか、何の目的で作られたのか。いずれにしても古代エジプト人の知恵とエネルギーの集大成には間違いない。

カフラ王のピラミッドの前にスフィンクスが付属している。スフィンクスは、高さ 20m、長さ 57m、巨大な岩山を墓に造られている。カフラ王のピラミッドを守るかのように位置し、河岸神殿、スフィンクス神殿、参道と続き、ピラミッド手前の葬祭殿で構成されている。砂を掘るとスフィンクスが埋もれていたと説明を受けた。

エジプトはチップ制である。ホテル、トイレ等すべてチップが必要であり、日本人にはなじめず、苦労した。ちなみにエジプトで一番有名な日本人は、吉村作治早稲田大学教授とのことであった。



〔スフィンクスのヒゲは、大英博物館にあり返還交渉中〕



〔ギザのピラミッドにて〕



〔階段ピラミッドの前にて〕



〔じゅうたんを織る少女〕

エジプト社会におけるチップについて 11/17 21:50 エジプト空港着 気温 20 度

ホテルに移動。車中にて、現地手配の旅行会社から、エジプト社会におけるチップ相場について、レクチャーを受ける。エジプト（アラブ社会）は、宗教（イスラム教）のバクシーンという習わしがあり、チップの制度はないとはいいいながら、実際にはチップを出すのが習慣となっている。

郷に入れば郷に従えの例えのとおり、支払うとのことで、一同了解。

- ① ガイド 1日当たり 20 ドル（US \$） 最終日に渡してもかまわない。
- ② アシスタント 1日当たり 15～20 ドル
- ③ ドライバー 1日当たり 10～15 ドル
- ④ トイレ使用時 50 ピアストル（約 10 円）等

※バクシーン「これは、本来は裕福な人が貧しい人に施しを与えるというイスラム教の戒律」

⇒ レストラン、空港でもトイレトペーパーを 20 センチぐらいに切って渡す係りの人がいて最初は、チップを出したりもしたが、こちらはハンカチを持っておりバクシーンをしなかったときもある。

サッカラ地区の灌漑システムと農場視察 11月18日

～水の偉大さ・大切さを改め感じる～

■視察概要



〔ヒューガルポンプで灌水〕

農家は、大型トラクター（100 馬力以上）所有もあれば、人力用の小農具で規模も 10a 未満の農家までと、貧富の差があまりに大きくびっくりした。

砂漠地帯のために、どのような灌水方法かと大いに興味を持ったが、あまりに簡単な方法であった。移動式（たぶんトラクターのけん引）の 4 インチ程のヒューガルポンプで運河（用水路）からくみ上げ、およそ 1 ha くらいと思う畑も、1～2 日、水をかけ流し、水をつける方法で、スプリンクラー等の器具はどこも目にできなかった。

一方で、用水路よりバケツで農夫が水をくんで畑に灌水していた姿は、その違いに衝撃を受けた。

栽培作目は、野菜から果樹にいたる農作物で、花卉類はまったく目にする事はなかった。また、ナイル川の東岸では、野菜、果樹を多く見ることができ、西岸ではほとんどがサトウキビで、大型栽培農家は裕福と思われるが、小規模農家は貧相な家の周りの圃場でニンニクやセリ等を栽培していた。

東岸地区の野菜は、キャベツ、ネギ、ナス、トマト、セリ、ニンニク、モロヘイヤ、トウモロコシと栽培品目は多くあった。キャベツについては、大きな玉で、日本の 2～3 倍はあると思った。水さえ与えれば、けっこう肥沃な土地である。

途中で見学をした農家は、ヤギ数頭と子供 5 人くらい…、でも、家族愛を感じることができた。

小高い丘から見れば、灌漑用水や運河の発達したところでは、緑があふれ見事な田園風景となっているのに気付く。耕地整理も立派で、良好な農地と思った。

しかし、灌漑システムや運河のないすぐ横では、茶褐色をした砂漠となり、水の偉大さ、生命の源を改めて感じた。当地においても、豊川用水にもう一度感謝し、水を大切に使うことをエジプトの地で、改めて知ることになった。



〔バケツで水をくむ農夫〕



〔随所で見られたトラクター〕



〔耕された農地〕

ナイル西岸文化史跡視察 11月19日

～メムノンの巨像、王家の谷、ハトシェプスト葬祭殿～

■視察概要



〔メムノンの巨像の前にて〕

【メムノンの巨像】

車でルクソールの西岸に渡り、メムノンの巨像、ハトシェプスト葬祭殿及び王家の谷を視察する。

生者の世界といわれた東海岸には神殿群、死者の世界といわれたこの西岸には、墓地遺跡群がある。荒涼としていて殺伐たる風景であった。

左がメムノンの巨像。新王国時代には、アメンヘテプ3世が建てた葬祭殿の正面にあった。

後の王たちが、神殿などの建築材料に石材を持ち去り、現在では像だけが残っている。台座だけでも2.3mもあり、その上の像は15.6mにも及ぶ文字通りの巨像である。

【王家の谷】

新王国時代の紀元前1520年頃、トトメス一世が王墓の造営を開始。歴代のファラオの王墓が点在しているところで、右写真が王家の谷への入口である。

墓はすべて岩窟墓であり、古代エジプト人は墓を「死者の家」と考え、そのため多くの副葬品や供物が捧げられていた。

有名なツタンカーメン王の墓の玄室は、奇跡的に盗掘を免れたため、黄金の棺がそのまま残っており、興味津々であった。



〔王家の谷の入り口〕



〔ハトシェプスト女王葬祭殿の前にて〕

【ハトシェプスト葬祭殿】

ハトシェプスト女王葬祭殿は、王家の谷の東、切り立った断崖の下に建っている。父トトメス1世とアメン神、そして自らに捧げるため、デイル・エル・バハリの絶壁を背後にした高台に造らせた神殿である。ハトシェプストは、王トトメス2世の王妃で、夫の死後に即位したトトメス3世の摂政となり、権力を独占する。以後20年にわたり王権を握る。その壮大なスケールは、女王の威勢を余すところなく伝えている。

柱廊を備えた複雑な構造で、玄関の周囲には、女王の主な業績が刻まれている。

彼女の死後、ようやく王位についたトトメス3世は、積年の恨みから立像を燃やして破壊し、その存在を抹殺したとか。

1997年にテロリストによる銃乱射事件があり、日本人10人を含む60人以上が死傷したという。

一同ご冥福を祈る。

ナイル東岸文化史跡視察 11月20日

～ カルナック神殿・ルクソール神殿 ～

■視察概要



〔アメン大神殿〕

【カルナック神殿】

紀元前 1500 年前に歴代の王によって、多くの神殿が建てられ、これらの神殿群を総称してカルナック神殿という。

通常、観光客が訪れるのはアメン大神殿。参道には羊の頭をした 40 頭ものスフィンクスが並び、トトメス 1 世やパトシュプスト女王のオベリスク(柱塔)や巨大な大列柱室、祝祭殿など古代の歴史の深さを感じた。

その後ナイル河畔に建つルクソール神殿を見に行き、ルクソール神殿はカルナック神殿に付属する副神殿で、昔はカルナック神殿とは 3 km の参道でつながっていた。



〔大神殿の巨像〕



〔まさに圧巻の大列柱〕



〔ルクソールのホテルの前で〕

【ルクソール神殿】

第 1 塔門のオベリスクは、25m 程の高さがあり、元は 2 本あったが、1 本は 19 世紀中頃にフランスに寄贈され、現在はパリのコンコルド広場に立っている。内には色々な庭、壁などがあり、特に壁などには、レリーフや象形文字などが色あせてはいるが、当時のまま残っており、両神殿ともに古代の生活を空想すると共に歴史を近くに感じた。また、世界の遺産を世界中の人々が観光に来ており、神殿の中は人の波でいっぱいであった。



〔ルクソール神殿第 1 塔門〕

リビア・首都トリポリ視察 11月21日～22日

リビア国外務副大臣・トリポリ県知事等表敬訪問

■リビアの概況



リビアは、大リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒリーヤ国が正式な国名で、北アフリカ高原地帯の一部をなしており、日本国土のおよそ4.8倍の広さで、地中海沿岸から内陸部に点在するオアシスを除くと90%が砂漠である。

時差は－7時間。気候は、海岸地方は地中海性気候と、内陸部の砂漠性気候に大別される。また、季節は夏と冬があり、日本のようなはっきりとした四季はない。

訪問滞在をした時は、日中、24～25℃、夜間は10～11℃であったが、朝、夕はとても冷える（2～3℃）こともあるとのことだった。

乾燥気味で、常にペットボトル（1.5ℓ）を携帯した。人口は560万人と推定され、周辺諸国より400万人ほどが入り込んで生活をしているといわれる。そのため、およそ1,000万

人が生活をしている。

社会主義国のため、国民生活は最低が保障されている。1米ドル＝約1.30リビアディナール＝約83円が当時の相場。

最高実力者は、9月革命指導者ムアンマル・アル・カッザーフィ氏（以下「カッザーフィ大佐」）。国連による制裁は、1992年から1999年の7年間にかけて停止、2003年に解除される。それまで国際的孤立状態に陥っていた。

リビアは、石油資源が豊富（世界9位でアフリカで1位）で、高品位な原油が生産されており、輸出のほとんどを占めている。政府の財政収入の約60%、輸出の約95%と、大きく石油に依存している。国連制裁停止後は、経済の自由化、過度な石油依存体質からの脱却及び民営化を通じた構造改革が図られている。

公用語は、アラビア語で、宗教は、スンニー派イスラム教徒が大多数である。

トリポリ市は、リビアの首都であり、市長は東京都という知事だといわれる。そのため、今回訪問したトリポリの市長は、県知事として表記することとした。

（参考資料 在リビア日本国大使館リビア案内）

11月21日

■早朝、リビアに到着

11月21日 3:50

前日の午後6時30分にホテルにて夕食後、ルクソール空港へ。午後9時40分のカイロ行きの飛行機に乗る。

カイロからトリポリへの空港での手続き

- 何のためにリビアへ行くのか。裏付ける資料があるのかと要求される。
- 持参した市長からの親書、リビアでの日程を資料として提示する。

翌11月21日、午前1時05分カイロ発、リビア・トリポリ行きに乗り、空港に午前3時50分着。空港は、ラマダーン明けの休暇を利用した巡礼帰りの人でごった返していた。

カイロ空港出発前にスーツで出かけるかラフな服装でいいか話し合ったが、移動日なのでラフな服装で出かけることにする。



〔トリポリ空港貴賓室、左がナイリさん〕

午前4時14分、出迎えは、大使館の人も含め2、3人の方が迎えにきてくれていると思ったが、空港に着いたらこんな時間にもかかわらず、なんと10数人の方が出迎えに来てくれていたのにはびっくり。やっぱりスーツにしたほうがよかったと思ったがもうどうしようもない。

出迎えの中に、駐日リビア大使の息子さんのマルワンさんと、一度田原市へ来たことのある日本語が話せる明治大学留学生ナイリさんの姿が見えて少しほっとする。すぐに特別貴賓室に案内される。広い部屋ではあるが、そんなに華やかなものではない。

ほとんどお互いの紹介もないまま、隣に座った人からアラビア語で書かれた書類を見せられる。少し訳してもらうと、トリポリ市と田原市との姉妹都市の契約書のようなものだった。表敬訪問時において、調印してほしい旨依頼される。

そこで今回のリビア訪問の目的は、私たちの目でリビアを見てそれを市長はじめ田原の市民の皆様に正しくお伝えすること、そして万博でリビアのホスト市としてナショナルデーに協力することなどを説明した。残念ながら、この訪問団には姉妹都市の契約を結ぶ権限は与えられていないことも付け加えた。一瞬気まずい雰囲気になったような気がした。



〔トリポリ空港貴賓室〕

入国手続きは、すべてリビア側がやって、2日間の予定表を渡される。滞在中のホテルを用意してあるので、そちらへどうぞといわれるが、旅行会社を通じ手配しているので、リビア側からの申し出を断る。それではホテルの宿泊費を払うといわれる。それも丁重にお断りする。

空港貴賓室（正面にカッザーフィ大佐の絵が飾ってある）

出迎え者 分かっている方のみ。リビアは名刺交換の慣習がないこともあり、出迎えた方の氏名が分からない。名簿みたいなものがあればいいが、それもお国柄が出さない。政情不安の名残か。

リビア側

- ・ Ahmed M. NAILI ナイリさん（通訳 明治大学大学院留学生）、
- ・ MARWAN Muftah FAITOURI マルワンさん（在日本リビア大使の次男）
- ・ トリポリ市の担当者、トリポリ市の交通関係担当者等

日本大使館

- ・ 角田書記官

角田書記官から、リビアの概況、注意事項等の資料をいただく。併せて、塩尻大使からの歓迎夕食会の案内もいただく。

ナイリさんからの後日談

ホテルの支払いをリビア側にさせ、ひどいときには、ホテル客室の備品もなくなるそんな視察団もあったとのこと。

注 現地でのトラブルを避けるためにも、日程と支払いのことを訪問前にしっかり確認をしておくべきだと思う。

【渡された2日間の予定】

区分	当初の予定		訪問等結果	
11/21	時 間	訪問先等	時 間	訪問先等
①	11:00	カッザーフィ大佐の元の家の見学。	10:45	日程打合せ
②	12:00	リビアの要職者（リーダーの一人）と面会。外務省の副大臣と思われる	11:50	外務省シアラ副大臣表敬訪問
③	13:00	ホテルに戻って、昼食	12:20	ジャマヒリア博物館
④	16:00	ジャマヒリア博物館	14:25	サブラタ遺跡
⑤	18:30	トリポリ県知事の秘書に会う。	19:00	日本国大使館公邸にて夕食会
⑥	19:30	日本国大使館公邸にて夕食会		
11/22	時 間	訪問先等	時 間	訪問先等
①	10:30	国際慈善基金表敬訪問	9:45	アルタカドム小中学校視察
②	12:00	トリポリ県知事との会談（姉妹都市提携にサインする。）	10:50	在リビア日本国大使館表敬訪問
③	13:30	昼食（グループの人たちとの会食）	11:25	トリポリ県知事表敬訪問
④	15:00	自由行動	12:45	市内視察
⑤			14:05	県知事秘書との昼食懇談会
⑥			16:05	国際慈善基金表敬訪問

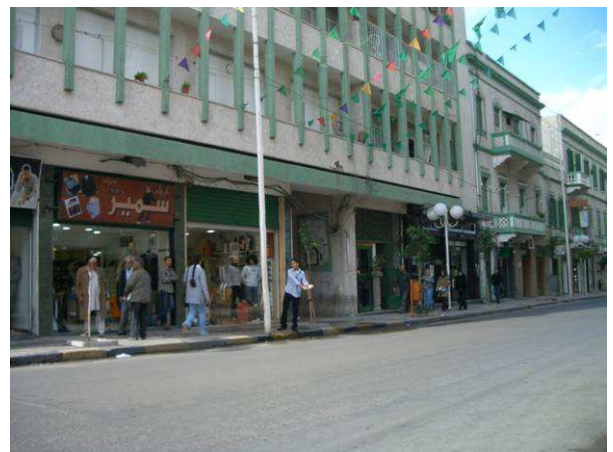
大使館側のコメント（角田書記官）

今回の件は、リビア政府側が任せてくれと言われており、日本大使館側ではタッチができなかった。この日程も直前にできた模様であるので、まだ流動的である。日程は、テンポラリーである。（臨時的、一時的）

翌日の日本の大使館訪問は、大使の予定が立て込んでおり、今晚の歓迎会に代えるかもしれない。（表敬訪問を夕食会で行うかもしれない。）



〔トリポリ市内〕



〔同じく市内、商店が並ぶ〕

■示された友好都市契約案について

アラビア語で書かれた姉妹都市合意依頼の文章。日本語文はなく、二日目に在リビア日本国大使館から仮訳をもらう。アラビア語文のこの書類は、エジプトから同行したガイドに翻訳してもらうため、ホテルにて渡すものの回収することを失念したため、持ち帰ることで済む。

(在リビア日本国大使館による仮訳)

トリポリ市と田原市との姉妹都市合意

リビア社会主義人民アラブ国と日本との間に存在する緊密な関係を強化するため、及びトリポリ市と田原市のいずれもがトリポリ市と田原市の住民の間の文化・社会・経済関係の増進を希求して、その確認のため、双方は以下のとおり合意した。

- 1 双方は、トリポリ市と田原市との間に姉妹都市関係を樹立することを宣言する。
- 2 両市は、相互の関係を強化し、その関係を社会的、文化的、経済的に増進させることに合意する。
- 3 両市は、その住民のために双方の間で各種活動の交流を行うこととする。
- 4 双方は、この合意文書の原則を具体的に履行するために定期的に会合する。
- 5 双方は、合意事項を実施するための行動計画を策定する。
- 6 この文書の各条項は、署名及び認証の日より施行される。

年 月 日

市において

アラビア語及び日本語により作成された。

トリポリ県知事
(Secretary, People's Committee
Shabiya of Tripoli)

田 原 市 長

■コリンシアタワーズホテルへ到着

11月21日 5:55

空港の貴賓室を出て、用意してくれた3台の儀典車に分乗し、コリンシアタワーズホテルに向かう。

早朝の道路は、空いていて猛スピードで、150キロくらいは平気でとばす。しかしこの道も昼間は渋滞する事もたびたびあるそうだ。

約一時間でホテルに着。ホテルに入るには空港にあるのと同じ金属探知機の下を通り抜けなければならない。このあたりが日本のホテルと違うところだ。このホテルは、日本の一流ホテルと同等の立派なホテルであった。

少しすると薄明るくなりホテルの部屋から港と旧市街地、そして地中海が一望できる。12階の部屋から見える景色はすばらしい。やっとリビアに着いた実感がした。



〔コリンシアタワーズホテル玄関〕

『ただ先ほど見せられた契約書の件がありもし契約を強く迫られたらなんと言おうか考えていたら、ほとんど寝るまもなく待ち合わせの時間になってしまった。(団長談)』

儀典車のこと

リビア滞在中は、この儀典車のお世話になる。渋滞の車の中を縫うように、猛スピードで移動する。事故にならないか、ハラハラしながら乗車する。

スピード、走行のすべてが最優先、たまにある信号が赤でも一般車を止め、横道をすり抜けて走る。いくら政府の車とはいえ、どうかとも感じたが、これでよいとのこと。

※ これらの運転手は、厳しい試験をクリアした優秀なドライバーだそうで、プライドを持って仕事をしているとか。「これからも交通安全、安全運転で」といって、日本手ぬぐいを渡す。

3人から、シュ克蘭（ありがとう）

（日本大使館嘱託書記官談）

やはり、交通事故は多い。公式に発表されたデータを日本と比較すると3倍くらいは多い。

ただ、これは表に出た数字であり、実際はもっと多いのではないか。

■スケジュールの打合わせ

11月21日 10:45

午前10時45分。ホテルロビーで、こちらで依頼したリビアの旅行会社とリビア政府関係者とスケジュールの打ち合わせ。

当初、リビア政府から示されたスケジュールに時間的余裕がありそうなので、旅行会社のプランの文化遺産を視察する旨を申し伝える。このことで、双方で少し感情的になる。政府関係者から、どちらの案を採るか決断を迫られる。当然として、リビア政府側の用意してくれたメニューなのだが。

主な会話（○リビア、●視察団）

リビア政府関係者とやり取りするトリポリの現地旅行代理店。われわれの意向は、リビア政府の示された日程どおりと、両者に伝えてある。

にもかかわらず、激しく口論しているように見える。

- どちらが大事か。観光を優先するのなら、セットしてあるVIPとの会見をキャンセルする。
- 当然、政府の用意していただいている日程でお願いしたい。代理店のプランは、時間的余裕があれば、行いたいと申し上げただけである。

（後日談）

政府関係者と現地旅行代理店。お互い張り合って、議論している。日本の感覚とは違う。何とか収まって、やれやれ。政府の日程どおりだから、もう代理店に用はないと思われたのだが、なんと同じ儀典車に乗って、視察先で解説をしてくれる。なんだか分からない。

その晩には、送ってもらったホテルのラウンジで仲良くお茶を飲んでたりする。

（よかった、よかった?!）

そのとき気付いたこと。

私たちのスケジュールの立て方とは根本的に違う。大まかなところは押さえていると思うが、携帯電話で常にどこかに連絡している。

事前にアポをとって、それに従い訪問するのではなく、空いているところから入れていくそんな感じがする。

善意に解釈すれば、その部署の最高の人に会わせるために最大の努力をしてくれたといえるかもしれないが。

11時50分、モハメド・アルタハー・シアラ外務省副大臣閣下を表敬訪問する。

「日本ではこんな重要なポジションにいる人とはなかなか会えないだろう。・・・」とナイリさんは言う。たぶん、駐日リビア大使が、日本で大臣クラスの人に思うように会えず、苦勞していることを言っているのかなと思った。多くの政府高官も同席し、少々緊張する。



〔右側が、シアラ外務副大臣閣下〕

ここでも、田原市とトリポリ市との友好都市交流事業の一件が話題となったが、リビア訪問の目的を説明し、万博のホストシティとしての役割とお手伝いのできることはさせていただき旨を説明する。

持って来た田原市の要覧、観光パンフレット等で市を紹介する。また、市長からの親書並びに土産品を渡す。

訪問記念に、天狗の文鎮と華山の絵の扇子、日本手ぬぐい（市民まつりの手ぬぐい）とリビア国の万博バッジを渡す。

シアラ副大臣あいさつ

ようこそ 本当によく来てくれた。
大臣は、デリケーション（どこかの除幕式か）があり、会えない。
リビアは、今は政治のリスクはない。
地図では遠いが、今はテクノロジーがあり日本とは遠くない。
リビアの原油は、高品質である。世界から注目されている。日本の企業も出資をしてほしい。また、アフリカのマーケットの中心である。
今の大使（在日本）は、人間関係を大事にする。だから今回トリップ（旅行）できた。
リビアの2日間をお楽しみください。
（田原市来訪への呼びかけに応え）

副大臣

インシャー・アッラー。（神の思し召しがあれば）

関団長あいさつ

たくさんのお迎えありがとうございます。感激しております。
私たちの目的は、愛知万博に参加されるリビアをお手伝いしたい。また、4月7日には、リビアのナショナルデーがある。そのときにどんなお手伝いができるのか、お話をしたい。
これらの交流を通じて、リビアの方々との深い関係に（心通じる関係に）なれればと思う。その中から文化、産業の交流が広がればと思う。
どこの国よりもリビアを応援したい。
この2日間は、少しでもリビアのことを知り、市長に正しく伝えたい。
また、副大臣には、万博期間中は、日本に来ていただき、ぜひ田原市へお越しいただきたい。お約束してください。



〔田原市の概要をご説明する〕



〔万博リビアバッジを紹介、中央はナイリさん〕

ムフター・フェツリー駐日リビア大使の田原市訪問

平成 16 年 9 月 25 日の田原市への訪問は、大使がそれまで日本に来てから持っていたあまりよくない日本の印象を変えてしまうくらいの出来事だった。ということ、ナイリさんから、日本リビア友好協会の方からも聞いた。

田原市での皆さんのフランクなもてなしがよほど気に入られたのでしょうか。大使はよく親しい人に話されているそうです。

明治大学留学生のナイリさんのこと

あくまで想像ですが、駐日大使が私たちの対応のために帰国させたのではないかと思います。滞在中の私たちのスケジュール調整などは、すべて彼とマルワンさんがやってくれたからです。

ナイリさんは、お父さんが元駐日大使でリビアではかなり中枢の人物ではないかと感じました。

アラブの IBM

曾野綾子氏の著書「アラブの格言」にも書かれ、アラブ地域の旅行サイトで引用されたりしている言葉。日本人の間ではわりとよく知られた言葉かもしれない。

I = インシャー・アッラー 「神の思し召しがあれば」「神のみぞ知る」

B = ブクラ 明日。「いつできる?」「明日できる」(翌日も同様に)

M = マレシ 過ぎた事は仕方がないじゃないの。

田原市へお越しくださいとの団長の言葉に対し、シアラ外務副大臣は、「インシャー・アッラー」という言葉で応えた。やはり「神の思し召しがあれば田原市へ」と言っていたのだろうか？

■サブラタ遺跡と観光政策について

11 月 21 日 14:25~16:25



〔サブラタ遺跡〕

現地へ向かう道路の両側は、果樹畑が続いており、農場も整備されている。オリーブ畑（成木）や、オレンジ畑が広く続いていた。オレンジは、今は一つ日本円で 100 円くらいと高めだが、出荷最盛期ごろには 1 kg 100 円くらいだといっていた。

約 1 時間後、目の前に地中海の青い海が広がるサブラタ遺跡群に到着。当遺跡は、エジプトからギリシャ、ローマにいたる古代文明が生み出した大規模な遺跡で、地中海周辺国の一つであることが理解できる。

神殿、公衆浴場、円形劇場等があり、北アフリカでは保存状態のよい建物といわれているが、私たちから見れば放置状態に置かれているように見える。海に面していることもあって、侵食されている部分もあり、また石そのものが風化しており、早急に手を加える必要があるように思えた。

この遺跡もまだ一部で、土の下に埋まったままの状態もあり、今後どれだけ発掘されるかわからない。

トリポリから 80 km ほど西にある古代ローマの植民地として、地中海沿岸に栄えたサブラタの考古遺跡に案内してもらう。その繁栄ぶりは、今も残る壮麗な円形劇場やフォーラム跡などから見てとれる。1982 年にユネスコ世界遺産に登録されている。

遺跡視察までの道中の道路は広く、高速道もあり、比較的整備されているように思えた。



〔円形劇場〕



〔石柱の前にて〕

整備すれば歴史的にも大変価値があり、今よりもっと大きなリビアの観光の目玉になると思った。

敷地内の博物館については、所蔵されているものの中にはかなり重要なものがあるにもかかわらず、建物、陳列方法などとても大雑把な感じがし、多くの課題を感じた。

なお、サブラタの街は、海水浴が楽しめるリゾートとして開発されつつある。また、トリポリ市から東側約 100 km の場所にも、400ha 以上の都市遺跡が発見されるなど、そのほかの観光資源も数多くあり、今後の開発が期待される。

昼食時間が遅くなったため、サンドイッチ（鶏肉入りの大きなもの。ちなみに飲み物は、コーラ）を用意してくれた。



〔サブラタの博物館〕



〔円形劇場の中で昼食〕

サブラタ遺跡

リビア西海岸に築かれた地中海交易都市で、地中海に面したサブラタの地に最初に街を築いたのはフェニキア人。紀元前 9 ～ 前 8 世紀前に交易拠点として建設された街でフェニキア大植民都市の一つとなっている。

紀元前 46 年、ローマのアフリカ属州の一部となる。紀元前 2 世紀頃、トラヤヌス帝の頃、ローマ植民市となり物資の輸出港となる。ローマ式の神殿、公衆浴場、円形劇場等があるが、ゲルマン系ヴァンダル人に 455 年に侵攻され、7 世紀にはアラブ・イスラムにより無人の街となる。

■教育研究所（高等研究学園）を訪問

11 月 21 日 17:25



〔団長の右隣が有名な先生だと紹介〕

サブラタ遺跡から市内への帰路、急にそこに恩師がいるから寄らないかと提案されそこに寄る。恩師は、オーストラリアで勉強された先生だという。

その研究所は、芸術から化学まで各部門専門の学生が集まっていて、「彼らが将来のリビア発展のために大きな役割を果たすだろう。これからは、外国で勉強した人の知識、経験が大いに役立つだろう。」とナイリさんは言う。

残念な事だが、スケジュールに追われて短時間でそこをあとにした。もう少しいろんなことを話してみたかったが。



[造成中の住宅団地]

外国人居住宅地（企業の住宅）を見学、市民住宅の雑然さと違い、整然とした住宅地である。外国の企業の駐在員、働く人専用の住宅団地。

入り口にはガードマンがいたが、そのゲートを開けて入って行くと地中海に面した一角に、住宅と広場が程よく整備されていた。かなりの戸数があり、ジョギングする人の姿やベビーカーで子供さんを連れのお母さんの姿も見えた。外国の企業を大切に作る国の方針だろうか。

ただし、郊外にあるので生活の便利さを求めて、ここからトリポリ市内に移り住む社員も多いとのことであった。

大使の招待により、和食の会席料理をいただく。アルコール類も出される。

- ホスト 塩尻大使、田村参事官、角田書記官
- ゲスト 田原市議会訪問団、ナイリ氏、マルワン氏



[公邸で記帳する団長、左が大使閣下]

夕方、在リビア日本国大使館公邸に招待をされ、塩尻大使をはじめ、書記官の皆さま、関係者より温かな接待を受け、入国以来緊張していた空気も少しずつ解けた。出発より5日目、口に慣れないアラブ料理から、今夜は心を込めた久しぶりの日本食のサービスを受け、ピークに達していた疲れもとれた感じがした。まさかりビアの国で刺身を口にしようとは誰一人思わなかったと思う。

塩尻大使のおもてなしで、2時間があっという間に過ぎた。細部にわたる生きたリビア情報などは、とても参考になった。

特にリビア国内には、国外から400万人以上の労働者が流入していて、これが大きな問題になっていく可能性もあることなどお話をされた。塩尻大使のリビアにかける期待の大きさは、来年の1月にリビアの若手行政官20数名を日本に研修に送りたいという言葉からも感じとれた。京都、広島等へ行く計画があり、そのとき田原にもトヨタ工場があり、研修のスケジュールに入れることができれば私たちもお手伝いできるし、そして田原市の様子もぜひリビアの皆さんに見ていただきたいと申し上げた。

なお塩尻大使も、1月には休暇をとって日本に帰られると言う。田原でぜひ再会したい旨を伝えた。



[公邸の応接室]



[大使のリビアの話に耳を傾ける]

塩尻大使あいさつ

遠路はるばるようこそリビアへ。これをご縁にリビアの理解を深めてください。

リビアの人口は、推計では560万人であるが、それ以外にアフリカ難民が400万人ほど入り込んでいる。

学校は、6・3制をとっていて就学率はいいい。社会主義国で、石油資本が充実し、最低生活が保障されている。しかし、石油の配分に問題があり、批判もある。

教育制度も含めて、自国内でまかなっているため、文化面をはじめとして諸外国からの刺激が少ない。1992年からの国連制裁の7年間で、交流が止まってしまった。

狭い範囲のコンタクト（国内）と広い意味のコンタクト（世界）では、影響は違う。教育は、やはり時間がかかる。海外に出ている人が少ない。ナイリみたいに外国へ出ている人、そんな人々がいないと、リビアは動かない。まだまだ、他の国と違って、行政レベル・バランスが違うようだ。

そのため、リビアの若手行政官20名を日本へ派遣して研修するよう外務省に計らっているところ。それが実現し、来年の1月の中旬に日本へ行くことになっている。

11月22日

■国立アルタカドム学校訪問

11月22日 9:45～10:40

民間と公立の両方の学校が見学したいとお願いし、国立アルタカドム小中学校を訪問する。民間の小学校は、突然の依頼でもあり結局見学はできなかった。



〔右が校長先生〕

児童数は、3,500人、先生250人で、6歳～12歳、12歳～15歳の小中一貫教育をしており、授業料は無料と説明される。上流階級の子供のように思えた。

入り口は高い扉でしっかりガードされていて、用務員さんが開けてくれて中に入る。60歳過ぎと思われる女性の校長先生と多くの生徒さんが出迎えてくれた。校長先生は、大変厳しく指導され、普通の学校を彼女の努力でトップクラスのモデル学校にした有名な校長先生だとナイリさんから説明を受ける。少数の男性教員もいるとのことだが、見えるのはベールをかぶった女性の先生ばかりである。



〔ベールをしていない生徒もいる〕



〔質問する団員一同〕

駐日大使からいただいた、カッザーフィ大佐の指導録とでもいうべき「緑の本」が、指導の中心にあるのだそう。その日本語訳を訪問前に読んだが、なかなか理解できなかった。

どれほどの権限が、校長先生に与えられているのかわからないが、あまりよくない先生はこの校長先

生の一言で辞めさせられることもあるとのこと。マルワンさんは、この学校の卒業生でその当時の担任の先生に偶然会って「立派になったけど髪は切ったほうがいい」とアドバイスをされていた。

作品展示室、化学実験室、歴史ミニ博物館等を見せていただき、また授業中のクラスにお邪魔した。私たち日本からの訪問者に「質問は」と先生が言うと、いっせいに手が上がり、「日本大統領の名前はどうか、人口は何人か、首都は、全国に何県あるか等」、右手の人差し指を立てて矢継ぎ早に質問する姿とその熱気にびっくりした。日本の子供たちは、こんな風に質問するのだろうかと思った。



〔廊下に肖像画〕



〔戦時資料を展示〕

特に印象に残ったのが、廊下の片隅に空爆で亡くなった女の子の様子が展示され、そこにカッザーフィ大佐の肖像画が飾られていたことだ。彼のことは授業の中でどのように教えているのか聞きたかったが、時間の制約もありできなかった。

報道担当の女子生徒が、最初から最後までビデオカメラを片手に同行してくれたが、私たちの帰国後どんなニュースを流してくれただろうか。

■在リビア日本国大使館表敬訪問

11月22日 10:50～11:00

翌日、日本国大使館を訪れ、前日の公邸での夕食会のお礼を申し上げ、大使と田原での再会を約束し大使館を後にした。

今回の視察については、塩尻大使をはじめ、大使館員の方には大変お世話になり、感謝申し上げます。

塩尻大使の主な会話

万博は、関心をもっている。リビアでの万博の窓口は、カッザーフィ国際慈善基金（カッザーフィ大佐の次男が代表者）が担当している。トップビップの1人として、日本をよく見て帰っていただきたい。それを支援したい。

実際に動けばいいが、日本流にはいかない。トップが行くとなれば、明日にでも行く。これがリビア流。リビアにはリビアのやり方がある。

外務省では、中近東の大使が集まり、今の問題について話をする年1回の会議がある。パレスチナやイラク、イラン問題、またサウジの石油問題が話題の中心。リビアの関係は後回しにされている。

確かに今は、リビアではごたごたはないが、中東にはリビアもスーダンもある。リビアは、昨年には他国に先駆けて大量破壊兵器計画の廃棄を宣言した国である。アフリカ・中東世界における地政学的重要性は、非常に高い。

田原市とリビアとの交流が、日本とリビアの幅広い関係増進の先駆けとなることを願っている。



〔休暇の際は、ぜひ田原へと要請〕



〔正面が塩尻大使閣下〕

後日談

- ・ 1月14日、25歳から39歳までのリビア若手行政官22名は、豊田市のトヨタ自動車本社が視察先となったため、わずか1時間程度であったが本市を訪問された。
リビア訪問議員団は、一行を熱烈歓迎。
- ・ 2月8日、休暇で日本へ帰国されている塩尻大使が田原へ訪問。関団長の強い願いが実現。市内を案内し、また田原南部小学校では急遽講師となっただき、アラビア語の紹介、リビアのお話を児童にしていた。市長との懇談もされ、その後はリビア訪問議員団による夕食会。また違ったリビアの一面が紹介され、理解が一層深まったようだ。
※ これで、リビア訪問時に約束した2点が発現した。4月7日の万博、リビアナショナルデーの盛況を、団員一同微力ながら応援したい。

■ダーリ・トリポリ県知事を表敬訪問

11月22日 11:25～12:30



〔県知事を表敬訪問〕

首都トリポリの市庁舎の訪問は、カッザーフィ大佐の肖像画のある会議室で行われる。リビアでは記念すべきホールだと説明される。市幹部の出迎えを受け、見るからに貫禄のある県知事さんに会う。軍隊出身の方かと思って聞いてみたが、スポーツ関係を専門にしてきた方だそうだ。

楕円のテーブルを囲んでの歓迎の式だが、自分たちのいつもやっているものとはまるで違う。

配布される式次第もなく、自己紹介もなく適当に県知事の歓迎のあいさつから始まり、私たちも歓迎のお礼、視察の目的をお話し、また団員による自己紹介などを行った。

ダーリ県知事からは、訪問記念としてペンダント及びペナントをいただき、また田原市側からは、天狗の文鎮と畢山の絵の扇子、日本手ぬぐいとリビア国の万博バッジを土産として渡し、万博での再会を祈って表敬訪問は終了した。

ここでまた、姉妹都市提携の話があるかと思って緊張して臨んだが、結局その話は出ずに終わってほっとする。

このころから、なんとなくではあるが関係者の皆さんとすこし打ち解けた雰囲気が出てきたような気がする。



〔県知事からペナントをいただく〕



〔日本手ぬぐいの使い方を実演する鈴木団員〕

帰りがけの庁舎の玄関にて、テレビ局の2人からインタビューを受ける。「リビアの印象は、どうか」との質問であった。

特に習慣の違いを感じたのは、携帯電話の使用である。この歓迎の式の挨拶の最中でも、またどんな場所でもひんぱんに携帯電話で話をしている。日本的感覚では非常識だと思うが、お国の違いかとも思えた。

ダーリ・トリポリ県知事あいさつ

田原市議会の皆さん、本当によろしく来ていただきました。ありがとう。お会いできてうれしい。

この場所は、大切なミーティングルーム。カッザーフィ大佐が、リビアのフリーダム（自由・独立）のために作ったホール。

リビア人の心の中で大切な場所です。

日本の民間企業のサービスの仕方について、興味があります。

皆さん、リビアをよく見ていてください。

シュ克蘭。

関団長あいさつ

田原市は、2005 年に日本で開催される愛知万博の貴国のフレンドシップシティーです。私は、日本国際博覧会協会からフレンドシップ大使の委嘱をされた田原市議会の関です。本日は、田原市議会の視察団としても兼ねて、メンバー5人で訪問しました。

今回の目的は、来年4月7日に開催される万博での貴国のナショナルデーを、フレンドシップシティーとして、成功させたい。そのために、リビアをよく知って、田原市民に伝えたいと思っています。

万博を機会に、リビアと田原市民とが交流する機会を持ち、相互理解を深め、友好が図られることを願っております。



〔県知事を中心に記念写真〕



〔テレビ局の取材を受ける団長〕

■旧市街地の視察

11月22日 12:45～13:40

市役所訪問後、旧イギリス・フランス大使館や美術館、図書館等を見学する。

ホテルから港の辺りは、ずいぶん近代的なビルなどが立ち並んでいるが、旧市街地（スーク）に一歩足を踏み入れると昔ながらの店が何百軒も集まっている場所がある。鍛冶屋をはじめ民族衣装、金細工製品、雑貨店などが狭い路地に立ち並び、店の飾り付けなどからアラブ独特の雰囲気を味わうことができる。店舗の中もあまり清潔とは思えないが、路地の賑わいにリビアの庶民の生活力を感じ面白い。ほとんどの店が外にイスが置いてあり、あるじがそこに座っている。



〔旧市街地の路地〕

金の加工品を扱っている店が多く、どの店にもお客さんが入っている。リビアの人と金の加工品とは特別な何かがあるのだろうか。夜、外国人が歩いて安全かどうかは、不安が残る。

このスークを歩いてみても、女性の姿が少ないように感じられた。



〔旧市街地の商店〕



〔金物店が多い〕



〔右写真の建物の中から撮影〕



〔散策中に記念写真〕

■トリポリ県知事秘書との昼食会

11月22日 14:05～15:50

●ホスト Cabtain:BASHIR EHRER 氏、他 10 人との昼食会。

我々ゲストを含めて総勢 16 人の遅めの昼食会。その料理のボリュームに驚く。同席のメンバーの紹介もなく、ホストを中心に食事をいただく。通訳はナイリさん 1 人のため、質問も団員が代わる代わる行うこととなる。

終了後、同席のメンバーは全員、英語では会話ができたとのこと。団員一同、英語の勉強不足を反省。



〔団長が謝辞を述べる〕



〔あいさつする BASHIR EHRER 氏〕

訪問団	4月7日のリビア・デーを成功させたい。 リビアへ来るまでは、なんとなく不安であった。安全を確認できだけでもいい。 1人でも多くの方に、日本へ来てほしい。
ホスト	日本には、興味がある。日本は、車のことしか知らない。リビアにとっても、日本の情報が少ない。 いつでも（リビアに）インビテイト（招待）することができる。どうぞお越しください。
訪問団	名刺交換をすることは、しないようだが。
ナイリ	リビア人は、名刺をすぐ渡さない。誰とでもする日本のような慣習はない。（注 渡したら死ぬまでのお付き合いになるそうだ。）
訪問団	学校の整備状況はどうか。
ホスト	学校は、義務教育だが、砂漠地帯では、学校に行かない子供も結構いる。都市部では100%通学している。国連制裁の7年間は、外国との学术交流はなく、とまってしまった。 1965年以前は、高校は1校のみであったが、最近では269校ある。1969年からは、うまく始まった。1996年から始まったまちづくりでは、病院とかを建設している。人口も学校も増えている。学校は大切である。 リビア人は、日本のシステムを勉強したい。
訪問団	町の中、沿道などに花や植栽がほとんどないようだが。 日本では、花をいろんなセレモニーに使用しているが、リビアはどうか。
ホスト	リビアも大切になってきた。花のための畑もふえてきている。 農家の土地は、私有で5から25ヘクタール。
訪問団	市内に犬がいないようだが。
ホスト	お祈りする時に、犬は邪魔になる。そのために猫が多い。

■アブドッサラーム・カッザーフィ国際慈善基金

11月22日 16:05～16:15

●対応者 執行理事の Saleh Abdussalam 氏、建築の専門家でパビリオン担当の女性



〔中央が、Saleh Abdussalam 氏〕

一方で、トリポリ市との姉妹都市を契約するならその力になれるとのコメントをいただいた。

持参した土産を渡し、慈善基金側からはリビアの織物をいただいた。

（土産は、天狗の文鎮と崑山の絵の扇子、日本手ぬぐいとトリビア国の万博バッジ）

リビアでの最後に、リビアにおける愛知万博の業務担当機関であるカッザーフィ国際慈善基金を訪問する。万博を担当するところだと聞いて、ここなら万博についてのお話ができると期待して訪問したが、万博担当の数名の方がスペインへ出張中だという。

リビアのナショナルデーを成功させるために、できる事は協力させていただくと伝える。その際、万博のプラン、スケジュールなどについて、プランを練って2週間後には送ると言われた。



〔織物をいただく〕

担当官	みなさん、ようこそ 私は、財団の一番の担当者である。彼女は、建築の専門家。パビリオンの担当者である。 この財団は、カッザーフィ大佐の会社の一部で、愛知万博の業務を担当している。 主な仕事は、コンテポラリーアート（現代芸術）と古い遺跡、美術館の紹介や人権擁護、ドラッグ（麻薬）の撲滅など。そして、アフリカ（主にスーダン、ナイジェリア、マリ）のボランティア活動やアフリカ大陸の病院・学校建設のためのユネスコ活動もして、世界の貧困の人々を助けている。ユネスコ事務局長の松浦氏には、お世話になった。
担当官	トリポリ市と田原市の交流について、何でも手伝うことができる。
訪問団	人口は、トリポリの方が断然多い。人口が違いすぎる。 いきなり姉妹都市とするよりも、いろいろ交流する中で考えたい。交流を積み重ねて、その結果そうなればいいのではないか。
担当官	トリポリとの人口・広さとの差は、考えないでください。トリポリと田原との交流について、この財団を使ってください。
訪問団	少しの滞在であったが、リビアのよさが分かった。私たちは、この4月のナショナルデーに何をお手伝いできるのか、お聞きしたい。
担当官	愛知万博のその日は、大切な日。リビアとしては、決まれば大使館に連絡をする。財団の中でも1～2週間でプランを練ることができる。（結局、送付されず。） 田原市側でもアイデアがあったら、渡してほしい。
訪問団	（同席の）女性の方も、ぜひ田原へ来てほしい
女 性	シュ克蘭（どうもありがとう）

■想像していたリビア



〔市街地の商店〕

リビア国及びトリポリ市の印象は、カッザーフィ大佐の独裁下で全く自由のないイメージの国家と思っていた。そのため、空港あるいは市内に、軍隊とか警官がいっぱいいるだろうと想像していたが、ほとんど見られなかった。エジプトのように、市内は銃を持つ兵士の姿も見えず、治安面でも安心感があり、活気も感じられた。もちろん、軍隊などは目立たない場所に配置されているのだと思う。違う形の組織が何かあるのだろうか。それにしても、治安は私たちが想像していた以上によいというのが視察団の実感である。

市内の大きな建物の中には、いたるところでカッザーフィ大佐の肖像画が掲げられていたが、街路にはほとんどなかったように思えた。（肖像画だらけになったら、人心が離れている証拠。政権も末期症状という説もある。）

石油産出で世界第9位の国だけあり、市民の多くは、ほどほどの生活をしているように見えた。

幹線道路は整備されており、市内も新興市街は道路も広く、自動車の交通量に驚く。（中古の日本車も多い）しかし、道路には、3列にも駐車され通れるのは1列のみの所もあり、渋滞も目に付いた。マナーの悪さが目立つ。交差点は、信号があまりなく、車優先社会であり、道路横断は一苦勞（エジプトも同じ）した。

旧市街地では、3m～5mかと思う程の道幅で、小さな工芸商店が多く連なっていた。女性はほとんど見るのがなく



〔駐車場は車でいっぱい〕

(注 用件なく女性は、外出をしないそうだ。)、とても不思議な国だと思った。また、女性はベールを頭部に巻いていて、頭髪を見せない。子供(小学生)の頃からベールで覆っている

お酒、豚肉はイスラムの教えのためか、見ることはできなかった。酒の好きな方は、リビア訪問中は一滴も口にするにはできない国である。そのため食事の時は、ジュース、コーラ等を飲んでいる。また、豚肉に関しては、一切口にすることなく、話題としても禁止、イスラム教の教えの重さを特に感じた。娯楽施設等はほとんどないようだ。

時間にルーズなのか、国民性なのか、決められた時間がないのかと思えた。

私たちが帰国する日に、フランスのシラク大統領が訪れるとのことで、私たちの宿泊したホテル及びホテル前では、歓迎の準備がされていた。

■イスラム教の5つの柱

イスラムは、宗教が根本であるものの、日常生活や文化といった生活の隅々までに広がっている。その信仰を支える5つの柱は、次のとおりとなっている。

1 シャハード (信仰告白)	「私は、アッラーの他に神はなく、マホメットはその使わし人であることを証言いたします」と唱えること。
2 サラー (礼 拝)	毎日5回(夜明け、正午、午後、日没、夜半)の時刻に「モスクの方向に向かってアラビア語で礼拝を行うこと。
3 サウム (断 食)	ラマダーン(ヒジュラ暦(イスラム太陰暦)第9月)の昼間に一切の飲食、喫煙、香料などを絶つこと。
4 ザカート (喜 捨)	喜捨の意味で、コーラン(経典)の中にも心得として記されており、収入の一定の割合を貧困階級の人々に分け与えなければならない。自発的な喜捨は、サダカと呼ばれ、区別されている。 エジプトで言われたバクシーンは、このサダカに含まれるとか。所得のある人から施されるのは当然だという意識に基づくともいわれる。
5 ハッジ (巡 礼)	ラビア語で「巡礼」を意味し、余裕のある人は定められた方法により、メッカのカーバ神殿及びメッカ北郊の聖地への巡礼を指す。

上記のごとく、厳しい教えなのに、一夫多妻制を容認している。4人まではよいとのこと。様々な人間の実態を考えた場合に、より多様なものを容認するというイスラムの寛容さを示しているともできるのではないだろうか。

ラジオからコーラン

移動中の儀典車の中で、運転手がラジオのスイッチを入れる。それは、何かと聞いたら、一日中やっているコーランと言われる。ちょうど、礼拝の時間と思われた。

■その他、気がついた事

- 1 タバコを吸う関係者は少なかったが、町ではどこで吸ってもよいようだ。
- 2 道路には、ところどころに段差を設けて意図的に膨らませたところがある。暴走を防ぐ手段だとか。
- 3 議論好き。けんかをしているように思えた。
- 4 スケジュールの変更は、ひんぱんにおこる。
- 5 写真撮影は、銀行の中での撮影以外は、禁止されなかったが、撮影には注意が必要。
- 6 食事は、個人差もあり一概に言えないが、口に合わず、あまり期待しないほうがいい。が、海が近くにあるので新鮮な魚は手に入りやすいかもしれない。
- 7 日本人観光客は、少なく、ホテルで数人と会った程度で、滞在中には他では見なかった。

日本リビア友好協会常任理事熊本幸治氏からの情報（平成 17 年 1 月 6 日 田原市へ来訪）

- 1 リビアと日本の企業との関係は、以前は活発であったが、国連制裁が決まった後、ほとんどの企業がリビアから撤退。その中で撤退しなかったのは数社のみ。そんな関係で日本企業への信頼は薄い。日本政府としては、このような関係を打破するため、さまざまな分野でリビアとの関係が強化されることを望んでいる。
田原市のように、純粋に見返りを求めないリビア訪問は高い評価を得ている。そんな話を総合して考えると、あの契約書は駐日リビア大使の田原市への最大の心配りであったのかもしれない。
- 2 この国では、朝令暮改はよくある事。
- 3 平均寿命など日本と比較してリビアの人のほうが実年齢より 10 歳上と考えてよい。一説によれば平均寿命は 70 歳。

■トリポリ空港発エジプトへ

11 月 23 日 4:00

前日の午後 9 時 30 分、トリポリ市の職員 2 人が、お土産を持参してホテルのロビーに見える。銅版の飾りのお皿とナツメヤシ 5 箱をいただく。

ホテル発は午前 3 時、トリポリ空港に午前 4 時に到着。見送りは、リビア側は、トリポリ市関係者 2 人と、通訳のナイリさん。日本大使館側は、嘱託の書記官が見送りに来て頂いた。

渡航手続きも、フリーパスで、到着したときと同様に貴賓室に案内され、搭乗時間の 4 時 55 分の寸前まで部屋にて休憩しながら待機。

なんとトリポリの関係者の 2 人は、飛行機のタラップまで見送ってくれる。驚き。一同シュ克蘭。

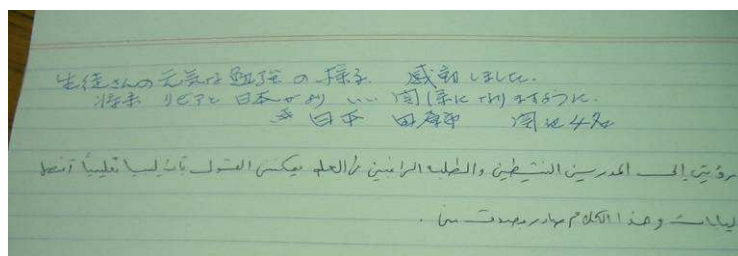
■リビアのまとめ

今回リビアを訪問してみたの感想であるが、わずかの期間の滞在ですべてのリビアを語るのは難しい。しかし、一言で言えば、私たちが出発前に持っていた軍事色の強い国という印象はなく、治安も想像以上によいと感じた。国民の生活も安定していて、エジプトのようにひどい生活をしている人は見受けられなかった。

リビアの外交政策に目を転じると、7 年間にわたる対リビア国連制裁が解除されたのを機に、国際社会への復帰に向けての努力が続けられている。現在カッザーフィ大佐を中心とした直接民主制を基盤とする体制の下で、国内情勢は安定しているが最大の課題は、カッザーフィ大佐後もこの安定を維持して行くことだと思う。石油のみに依存することなく、そのために多くの優秀な企業を外国から誘致する努力も続けられている。それとともに国際社会へ復帰するためには、他国の文化、宗教なども多くの人に知ってもらう事も必要になると思う。

現在リビアへは、飛行機で成田からエジプトのカイロまで 14 時間、さらにカイロからリビアのトリポリまで 3 時間で合計 17 時間。交流について言えば、この時間的な距離を埋めるのはとても大変な事だと思う。交流とは、人と人が出会い親しくなり、そして、さまざまな分野でお互いの訪問回数がふえ、さらに親しくなる事だと思う。

まずは万博を通じて、リビアの人との出会いを大切に、お互いの価値観、違いなどを認め合った上でお付き合いをしていくことが大切ではないだろうか。フェツリー駐日大使が、田原市の訪問を喜んでくれたように、心からのおもてなしこそが私たちのできる一番大切なことではないだろうか。



〔訪問したアルタカドム学校で生徒へのメッセージ〕
（ナイリさんにアラビア語に訳してもらう）

カイロ市内視察 11月23日

～ムハンマド・アリ・モスク、エジプト考古学博物館～

■視察概要

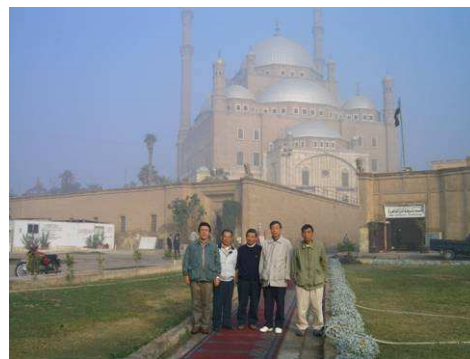
【ムハンマド・アリ・モスク】

1979年カイロ・イスラム都市世界文化遺産登録

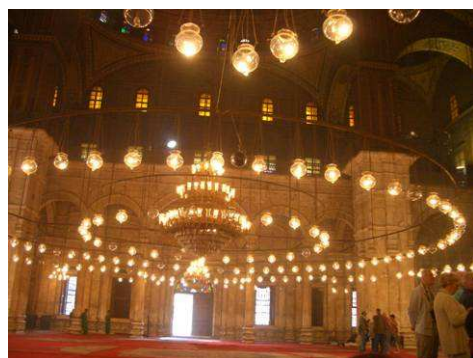
ムハンマド・アリ王朝の創始者ムハンマド・アリの名を冠したモスクで、今やカイロの象徴となっている。

1830～48年にモハメッド・アリによって建立された。モスクの一辺は41mで、中央のキューポラの直径は21m、高さ52m。

西側正面の2本のミナレット(尖塔)は円錐形のトルコ様式で84mの高さ。内部は、絨毯、シャンデリア、ランプ、ステンドグラスなどで美しく飾られ、祈りの声がドーム天井によく反響していた。



〔モスクの前にて〕



〔荘厳な雰囲気の内〕

広さ50㎡の前庭にある時計台は、モハメッド・アリが当時のフランス国王ルイ・フィリップにルクソール神殿にあるラムセス2世のオベリスクのうちの1本を贈った返礼としてももらったもの。

オベリスクは、現在もパリ・コンコルド広場に立っている。

前庭中央には、回教徒が日に5回の祈りを捧げる前に身を清めるための泉がある。

【エジプト考古学博物館】

1902年開館の、エジプトが世界に誇る秘宝を展示する博物館である。こぢんまりした造りであるが、部屋数は100以上に及ぶとか。博物館の中は、世界からの見学者でいっぱい、ゆっくり見られなかった。

その宝物の古さはもちろんのこと、展示物の多さもびっくり。最高の圧巻は、ツタンカーメン王の墓から出土した宝物の品である。黄金のマスクは、金が11kg使用してあるそうだ。実物は異様な光を放っており、何か神秘的な美しさが強く感じられた。ツタンカーメン王は、10歳足らずで即位し、王妃マンケナーメンとの夫婦仲のよさを感じる壁画を見れば、王様も現代人も同じだと時間を忘れることができる。



〔考古博物館正面〕

しかし、数年前のハトシェプスト女王葬祭殿での銃乱射事件からだと思うが、エジプトの各地で自動小銃を持った警官や軍人の姿を見ると、4000年も昔の人々が、この世の人たちに何か問いかけをしているようにも感じた。反省すべきではないか。

編集後記

平成 17 年 1 月 21 日、カイロ近郊の「ダハシュール北遺跡」を調査している早稲田大学古代エジプト調査隊（吉村作治隊長）は、古代エジプト第 13 王朝（約 3800 年から 3600 年前）ごろと思われる、未盗掘の彩色木棺とマスクをつけたミイラを発掘したと発表しました。現在も掘り続けられおり、歴史は今の時点から常に見直されているという、まさに「すべての歴史は現代史である」と実感いたしました。

アラビアン・ナイトの呪文の「開けゴマ」は、アラビア語で、『イフタフ・ヤー・シムシム』という。団員一同そんな気持ちで、リビアに出かけました。新鮮な驚きを感じ取っていただければ幸いです。



**平成16年度 田原市議会
海外行政視察報告書（エジプト・リビア）**

発行日 平成17年2月
編 集 〒441-3492
田原市田原町南番場30番地1
田原市議会海外行政視察団（エジプト・リビア）
電話 0531(23)3533 FAX 0531(22)5952
E-mail: gikai@city.tahara.aichi.jp